

2022 年度 第 4 回 現代文化人類学会（旧早稲田文化人類学会）定例研究会

発表者：酒井貴広（早稲田大学文学学術院 講師（任期付））

日時：2022 年 7 月 25 日（月）18 時 15 分～20 時 15 分

場所：Zoom によるオンライン開催

\* どなたでもご参加いただけます。ただし、オンライン開催のため、事前申込が必要です。

7 月 22 日（金）までに下記の Google フォームを通じて申し込みください。7 月 23 日以降、参加申込をされた方のみ、Zoom の URL をお送りします。

<https://forms.gle/ru5ERadtWkqdZrnK7>

タイトル：

儀礼の危機と持続可能性に対する考察——コロナ禍における強卵式の中止と再開に着目して——

要旨：

本報告では、栃木市都賀町家中の鷲宮神社で執り行われる強卵式（ごうらんしき）を事例に、地域社会における儀礼とサイバー空間上の言説との再帰的な関係を論じる。先行研究において強卵式は栃木県下の強飯行事の一形態とみなされてきたが、報告者は強卵式の特徴に着目するケーススタディを試みる。

報告の前半では、2001 年に創設された強卵式がサイバー空間上で付与された「奇祭」イメージを帯びつつ地域内外の人びとを魅了する過程を概説する。報告の後半では、コロナ禍の影響で中止せざるを得なくなった 2020 年強卵式と、ある外的要因から急遽再開された 2021 年強卵式について、フィールドデータから考察する。加えて、地域住民の儀礼に対する想いやサイバー空間上で強卵式が「バズった」事態にも触れ、今後の強卵式の持続可能性を論じる。

本報告の目的は、強卵式を特異な事例として過度に相対化するのではなく、あえて特徴的な事例を用いることで極端な成功（あるいは失敗）の過程を提示し、現代民俗の抱える可能性と問題を明らかにする点にある。強卵式という事例から、今後の民俗や文化の持続可能性に対し報告者の考える対策を挙げ、本報告の結びとする。

お問い合わせ：

現代文化人類学会定例研究会ワーキンググループ

箕曲在弘

[minoo \[a\] waseda.jp](mailto:minoo [a] waseda.jp)

\* [a]を@に変えて送信してください。